

## 初めての鑑能

中村 龍介

この三月、初めて「能」というものを観た。場所は水道橋の「宝生能楽堂」。演目は狂言「文蔵」と能「当麻(たえま)」。

実は、三女の麻子が、最近何故か能に御執心で、先般は鍔仙会の能楽体験ワークショップに参加したというから只事ではない。ワークショップでは、謡曲の練習はもとより実際に能面を付けて能舞台上上がるところまで指導を受けるのだそうだ。その麻子が、今度は生で鑑賞したいと、早速、鍔仙会の三月公演チケットを二枚手配したらしく、お父さん、一緒に行こう、ということになった。

私もクラシックのコンサートのだけでなく、日本の伝統芸能にも少し接点を持つてもいいかなという気持ちがある。歌舞伎は二度ばかり本格的なものを観た。箏、三味線、笛といった和楽器については、オーケストラ・アジアの定期会員になっているので、生演奏に触れる機会も少なくない。

未体験ゾーンは能、狂言、浄瑠璃の類だ。そういうわけで、急な誘いではあったがOKの返事を出してしまった。

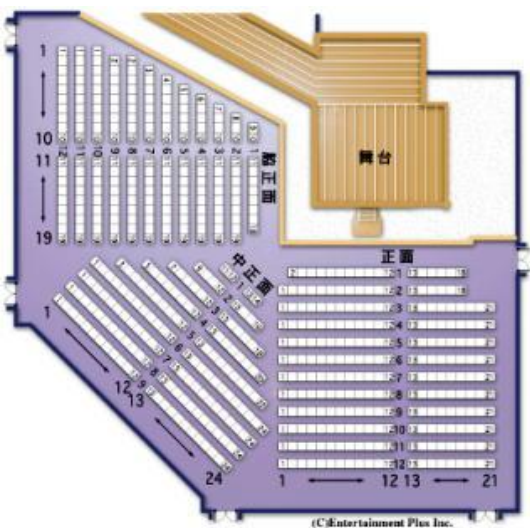
宝生能楽堂は水道橋駅の直ぐ近く。都営三田線を利用すると、我が家から一回の乗換で行けるので便利だ。が、地下鉄水道橋駅から地上に出るのに、エレベーターもエスカレーターもなく、七十段以上もある階段を歩いて登る。

昨年九月に肺がんの手術をして以降、肺活量がガタ落ちで階段は二十段が限界なのだが……。小刻みに休憩をとりながら、ホウホウの体で地上に出た。能楽堂は直ぐのところにあった。

麻子はまだ着いていた。六時半の開演までに三十分以上ある。何も食べていないので腹ペコだ。歌舞伎なら歌舞伎座にせよ、新橋演舞場にせよ、中に立派な食堂がある。また、各種の弁当も売っていて、座席で観ながら食べることまでできる。が、能楽堂にはそういう設備もサービスもない。また、近くに、手ごろなレストランも見当たらないので空腹に耐えるしかなさそうだ。

取りあえず、我々の席を捜して座ることにした。座席の配置は、劇場などに較べると随分変則的だ。

舞台の正面と左側に席がある。上から見ると、四角形の左と下の二辺に接して、全体で五百近い客席が設けられている。正面、我々の座った席がS席で値段もお高い。



初めての生の能鑑賞とあってそれなりに下調べをしてみたのだが、それでも奇異に感じるところが何点かあった。

まず、最初から最後まで超スローである。「序破急」は能から出た脚本の構成だと理解していたが、実際の能では「序破急」ならぬ「序序序」という感じなのだ。左の写真はクライマックスの場面だが、後シテの中將姫が自ら写経した経本をワキの念仏僧に渡して、浄土讚美の早舞を舞うのだが、この動きも超スロー。「急」のイメージはない。

次に、初めと終わりの区切りが明確でない。歌舞伎などの演劇は、舞台の下準備が整った時点で幕が開き、スタートとなるが、能では、幕は左の端にあって正面の観客席からだとか開いたかどうかともさだかではない。スタートはベルもなく、「お調べ」と呼ばれる、舞台奥での楽器の音合わせが始まると、囃子方や地謡が音もなく出て来て持ち場に座る。幕開けはその後。つまり、段取りや片付けは観客の目の前で隠さずにやる。終わりも、出演者が挨拶もなく黙って降壇し、最後のアシスタント役が下がる段になって初めて観客からまばらな拍手がある。

最後に最も奇異に感じたのは、最初から最後まで、出演者が観客に敬意を表する場面がなく、出演者と観客の一体感が感じられない。歌舞伎などでは役者が観客に向かって丁寧な挨拶をするし、クラシックのコンサートだって最後には、出演者全員が観客に向かって整列して挨拶をする。が、能という芸能は最初から最後まで観客無視の態度なのだ。舞台芸能である以上、観客に対して礼を払うのは当然ではないかと思うのだが…。

というわけで、今回の「当麻」だけで能に対する評価を決めてしまうわけにはいかないだろう。が、第一回目の鑑賞としてはチョット期待外れだったような気がする。

【二〇一七年六月記 原稿用紙約五枚 課題「弁当」】

